

2024年度 第1回 教育課程編成委員会 報告書

学校法人 センチュリー・カレッジ
専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー



理学療法学科

1. 日時・場所:

2024年5月29日(水) 18:00~19:30 オンライン会議

2. 出席者

(1) 教育課程編成委員

北谷 正浩 (公益社団法人石川県理学療法士会 会長)

西田 好克 (医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院 リハビリテーション室 室長)

(2) 本校教職員

狩山 信生 (専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 学校長)

曾山 薫 (専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 理学療法学科 学科長)

山本 達也 (専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 事務局 局長)

3. 欠席者

山崎 隆幸 (独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院 リハビリテーション士長)

[敬称略]

4. 会議次第

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 情意領域の評価について
- (4) その他
- (5) 局長挨拶
- (6) 閉会

5. 配布資料

- ・ 2024年度第1回教育課程編成委員会 パワーポイント資料
- ・ 資料1: 情意領域評価基準
- ・ 資料2: 情意領域 確認表
- ・ 資料3: 情意領域評価基準 (学内用)

6. 議事録

(1) 情意領域の評価について (学校長 曾山)

1) 臨床実習前後における導入の報告

- ・ 昨年度 (今年1~2月実施) 評価実習と今年度4月からの総合臨床実習I期において、全12項目の行動目標と3段階のルーブリック評価方法を導入。その後、実習指導者から活用状況等のフィードバックを収集したものをまとめ、経過報告を行った。

北谷委員) 指導者の指導後の感想は納得と共感できるものでした。
情意領域の評価は指導者の価値観によって異なることがあります。そのため、複数の指導者の意見を取り入れるのは良い考えだと思います。ただし、単純な場面と複数の課題や負荷のかかる場面の両方で、学生が同じように対応ができるかどうか、評価をする際には工夫や検討が必要だと感じました。

西田委員) 指導者の意見が大きく二つに分かれています。試行段階ですので、それほど気にする必要はないと思います。学生の情意領域の評価基準については、必要ないという意見もあれば、5段階に増やすべきという意見もあります。しかし、評価する側が各段階の内容をしっかりと理解して質を高めることで、私は5段階は必要ないと考えています。
短い実習だったとは思いますが、評価実習を通して実習前と実習後で学生に変化はありましたか?

学科長曾山) 学校でできたことが実習先では出来ず、実習開始から2週間後の中間の自己評価は下がる傾向がありました。しかし、早期にフィードバックを行うことで、後半に行動が改善された学生が多かったと思います。

西田委員) 実習地では評価が下がる傾向はあると思いますが、実習が終わると評価が上がる学生がいたということは、この情意領域評価基準や情意領域確認表が機能しているのか、あるいは現場の厳しさを肌で感じて自然と学生が変わったのかを、これから検証していく必要がありますね。

校長狩山) 情意領域の評価基準を導入した経緯を振り返ると、一つは、主観や価値観に左右されることなく、指導者も学生も、教員も、現在の段階を確認するためです。もう一つの目的は、実習を通じて、社会や臨床現場に適応できる学生を育成し、足りない部分を補って伸ばしていくことを共有するためです。

今回、指導者からの話を聞くと、段階付けを参考にしながらポイントを絞って、さらに上のレベルを求めている状況が多く見受けられます。その意味で、この取り組みは意図した通りの効果を発揮しています。

また、評価の段階付けについては、これ以上細分化する必要はないと考えています。まずは、総合臨床実習Ⅰ期を終えた学生の感想を聞いて、さらに精度を上げていきたいと思っています。

2) 学内での評価の検討

- ・社会人として「情意領域」で求められることを理解し、それを理学療法士として「情意領域」で求められる能力へつなげるために、段階的に指導する方法について説明を行った。また、学内における情意領域の評価の手順を説明した。
- ・「情意領域評価基準(学内用)」は、臨床実習における「情意領域評価基準」に準拠し、「行動」に着目した全14項目の行動目標とその達成度を3段階で設定。

北谷委員) 学生自身にも気づきを持ってもらうことが必要だと感じますので、この内容で良いのではないかと思います。

学科長曾山) 現場で新人教育の際に「どのような点に注目して指導を行っているか」を、委員の先生に伺ってほしいという教員からのリクエストがありました。指導のポイントや新たな項目があれば、ぜひ教えて頂けますか。

西田委員) 当院の新人教育の中で「身だしなみ」「報・連・相」「接遇」の中で特に重視される項目は、「挨拶」と「言葉遣い」です。これらができていなければ注意を受ける可能性が高く、何か問題が起きる可能性もあります。これらは働く上では必須の職場の基本であり、全ての従業員が身につけていることが求められます。

学生の評価を行う手順について、一人の学生に対して何人の教員が評価を行うのでしょうか？

学校長曾山) 教員全員が学生全員に対して行いますので、1人の学生に対して教員6名が関与します。教員間の意見のばらつきがあるのは、座学や実習の講義形態や内容によって出方が異なるからです。情報の共有をして、偏りをなくすという心構えをもって取り組むことを意気込んでいます。

西田委員) 人によって見え方が異なるため、最終的な1つのフィードバックにまとめることが難しいことも想定しておくことも大切です。

また、最初に学内で情意領域評価基準を提示して説明するという手順がありますが、学生への説明が難しいと感じます。例えば、身だしなみを整えることや期日や時間を守ることについても、人によって基準が異なります。これらは「社会人としてはっきり言わないけれど期待される範疇」という、情意領域の難しい部分だと思います。

学科長曾山) 教員間でも「基準」で意見の統一が難しい場合があります。学生に提示するためには、分かりやすい説明や伝え方を煮詰め、その上できちんと伝えることが重要です。

また、教員からの質問として「最近の学生の特性から、『これができなかったら成績に影響するのか』と聞かれた時にどう回答すればよいのか」というものが出されました。情意領域を点数化することに対して、柱を持った説明が必要であると考えられますので、しっかりと準備し、煮詰めていく必要があります。

校長狩山) 作成した行動目標や、教員がそれをどのような視点で評価しているかについて、ご意見を頂けて良かったです。学内の評価においては、学生との接触頻度で異なる判断になることは想定をしていましたが、情意領域の優先順位を置くべき場所が定まっていなければならないという点に気づきました。医療現場ではTPOに即した共感性や周囲に対する協調性は非常に重要であると考えていますので、学内で情意領域を評価する取り組みを、修正しながら、精度を高めていきたいと思えます。また、話は変わりますが、作業療法学科でもルーブリックを使用していますが、情意領域以外に、精神運動領域と認知領域でも使用しています。情意領域については、学科で分けてはいけないものではないかと感じるようになりましたので、両学科合同で討議したいと思えます。

西田委員) ここに書かれている評価基準は守らないと叱られる一方で、守っていても褒められないものですから、学生がどのレベルで基準を守るべきかを意識することはないと思えます。そこでアイデアが二つ浮かんだのですが、一つ目は、専門学校 金沢リハビリテーションアカデミーが料亭の「つば甚」と関係があるので、一流のサービスを提供している場所で働いている方の高いレベルの情意領域のスキルを、実際に肌で感じて、模範となる振舞いを学ぶ機会があれば面白いと思えます。もう一つは、情意領域で「みんなの憧れ」となる学生を示すことです。模範的な振る舞いを可視化することで、評価される振る舞いを理解し、自分の達成段階を把握することができます。模範とされた学生は「みんなの憧れ」とされることでモチベーションが高まります。そういった仕掛けがあっても面白いと思えます。

校長狩山) 日本で一番人気のあるテーマパークのホスピタリティを学ぶのも良いアイデアかと考えていましたが、日本独自のおもてなしを体験できる場所が、学校のすぐ近くにあることを気づかせて頂きました。

北谷委員) この度の災害支援でも感じましたが、相手に対して心地良さを与えられる関係性を築くこと、その距離感や配慮の匙加減はとても難しいものだと思います。我々セラピストは様々な職種や社会的地位の方々と接します。情意領域のスキルを高めていくためには、どのような価値観を持つかが重要です。これは経験によって積み重ねられていくものかもしれませんが、失敗を恐れずにチャレンジしていく姿勢が大切だと思います。

(2) その他

- ・令和6年能登半島地震後の臨床実習の受入れ状況の現状報告 (学校長 曾山)
- ・次回 第2回教育課程編成委員会 開催予定 10月下旬予定 (校長 狩山)

以上

作業療法学科

1. 日時・形式

2024年5月22日(水) 18:30～19:50 オンライン会議

2. 出席者

(1) 教育課程編成委員

東川 哲朗(公益社団法人石川県作業療法士会 会長)
田福 智幸(医療法人社団慈豊会 久藤総合病院 リハビリテーション科長)
中森 清孝(医療法人社団長久会 介護老人保健施設加賀のぞみ園 在宅部 副部長)
合歡垣 紗耶香(医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院 リハビリテーション室 係長)

(2) 本校教職員

狩山 信生(専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 校長)
山本 達也(専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 事務局 局長)
種本 美雪(専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 副校長 兼 作業療法学科 学科長)
坂下 宗祥(専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 作業療法学科 教員)

3. 欠席者

なし

[敬称略]

4. 会議次第

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 実習到達表・実習体験表について
- (4) カリキュラム内容の再検討
- (5) 事務局長挨拶
- (6) 閉会

5. 配布資料

- ・2024年度第1回教育課程編成委員会 パワーポイント資料
- ・学生体験表
- ・評価実習到達表

6. 議事録

(1) 実習到達表・実習体験表について [報告・検討] (学科長 種本)

- ・昨年10月開催の教育課程編成委員会で提案した「臨床実習の学生到達度の表記について」の議案をもとに、修正を加えて完成させた実習到達表および実習体験チェック表を、昨年度(今年1～2月実施)評価実習で活用した。その結果の報告と、改善すべき点の検討を行った。

<実習到達表について>

東川委員) 学生が自分自身の次の行動目標について理解するというのが導入の目的なので、次の臨床実習(現在行われている総合臨床実習I期)で改善できているかを見るということで、成果は後にわかるのですね。採点は到達目標は2点としているので、2点を超えていたら良いのですね?

学科長種本) 「指導をくり返すことで実施ができる」ということを到達としましたので、学校としては2点を到達目標としています。

合歡垣委員) 実習到達表の内容で感じたことは、新しい指導形態に実習指導が代わって、認知領域の指導について悩んでいる5～7年目の指導者が多い印象を持っています。指導者養成講習では、実践場面では技術を教える要素が強く伝わっていて、認知領域の部分は課題に近い内容で、手薄になりやすいと感じています。指導者が上手く教えられるのかという意味で、学生に求める評価の項目として、評価の基準が高いと感じましたし、とてもここまでは教えきれないなど感じてしまう部分も少しあります。指導者の新しい指導形態の捉え方によっても影響されてしまうのではないかと感じました。

評価は技術面を指導者と一緒に実践していくことも多いと思いますので、そうなると、認知領域の評価は上がってこなくなるのではないかと個人的に実感としてあります。

中森委員) 到達目標については、提示してもらった方が指導はしやすいですし、資料のように情意領域、精神運動領域、認知領域で評価表を分けていることも明確で分かり易いと思います。ただ、成長度の評価が厳しくなってしまうような印象を持ちます。合歡垣委員が指摘するように、採点では認知領域の基準が低くなってしまうことは否めませんが、これから学生の意見を聞いて目的が達成できたか否かを確認していくなかで整合性が持てるように進めて頂ければよいと思います。

田福委員) 実習到達表をまだ評価実習でしか使っていないので成果は分かりませんが、目標が行動に反映されたという所が確認できれば良いと思います。ただし、評価の基準が4段階しかないため、学生が自分の達成度を理解し、次に何をすべきかを把握できるかどうか心配なことと、どのようにフィードバックを行い、説明すればよいかも考える必要があります。また、到達目標が「2」ということは従来の評価基準の4割程度に相当するかもしれませんが、少なくとも6割を目指すようにしてほしいと感じてしまいます。もし「4」が高い評価であるなら、「2」と「3」の間を広げるなどの工夫をして、情意領域と精神運動領域の評価のバランスを取るようにした方が良くないかと思いました。

<実習体験チェック表について>

中森委員) 未実施の数字には、学生が実際に行っているにもかかわらず「していない」と判断されているケースが含まれている可能性があると思いました。これは、見学していることを作業療法士がしなければならぬことと認識していなかったり、検査バッテリーに従った評価でなければ未実施とみなしてしまうことが原因かもしれません。私が実習指導をする際には、見学した内容に日付を記入してもらい、それを毎日提出してもらって確認をしていました。

学科長種本) ご指摘の通り、指導者の方に考慮や工夫をお願いしなければならぬと感じましたし、付け方についても毎日したことを記録して最後に集計するとか、大幅な見直しが必要だと考えています。引き続き懸案事項として学科で検討をしていきます。

合歡垣委員) 新しい実習体験チェック表はまたこれから項目を見直しますか？

種本学科長) まずは総合臨床実習のⅡ期が終了した後に今回の結果を確認して、ご指摘を頂いた意見を踏まえて修正を進めていく予定です。

合歡垣委員) 私も定期的に学生に記録した内容を見せてもらって確認をしながら進めていきましたが、学生と指導者の間で「やっている」「やっていない」の認識がずれていることがありましたので、できれば指導者に確認をして貰いながら進めることが大切だと思います。また、新しい実習体験チェック表は日常生活動作がADLに一括りになっているので記入しやすい反面、大事な所が大きく括れすぎていると感じましたので、指導者側が意識をする意味でも、学校側が「ここはしっかり見せてほしい」という所はもっと細分化しても良いのではないかと感じました。

東川委員) 細かい点ですが、例えば、種別の発達機能のところに行動観察が入っていますが、種別によっては入れない方がよい項目もあると思うので、一度確認をしたら良いと思います。

種本学科長) ご指摘の通り、分野なども設けない方がよい項目もありますので、次の10月の教育課程編成委員会では提示できるように学科で協議していきます。

(2)カリキュラム内容の再検討 [報告] (教員 坂下)

- ・実習指導者として過去5年以内の臨床実習で感じていたこと、また教員として現場に入り感じた課題などをスライドにまとめて発表した。2年生の現状課題を踏まえ、大目標「専門的基礎力を身につける」の達成に向けて取り組んでいる授業内容や展開方法について報告を行った。

- 中森委員) 模擬症例、グループワークの実施で、学生の目が輝く瞬間、気持ちが動いた瞬間はどういった時だったんですか?参考までに教えてください。
- 教員坂下) 学生ひとり一人、興味や関心があることが違うと感じています。(具体的なエピソードを紹介) どんな時に反応が良かったが、薄かったかは、学生によって全く反応が異なるので、いろんな分野のことをやって反応見ながら進めることが大切だと感じています。
- 合歡垣委員) 私も授業をしていて、もっと多くの学生に熱心に聞いてもらえるように、できる限り実践を取り入れて工夫しています。実習に来る学生は、基本動作を観察して、その様子からどういう日常生活であるかを推測して繋げていく部分が抜けていることが多いです。授業でも基本動作の写真を見て姿勢の観察をして、その能力から日常生活を想像するように教えていますが、「イメージがつかない」とよく言われます。臨床で基本動作を観察することはとても大切だと考えていて、ADLの工程を細かく分析する際に基本動作があり、その前段階を上手く結びつけて考えることが必要だと思います。しかし、基本動作は作業療法のカリキュラムにはあまり含まれていないのでしょうか?
- 学科長種本) ADLの授業で基本動作の動作分析や疾患との関連性は教えていますが、縦割りの学習になってしまっているようで、基本動作から連動したイメージを持つところまで達していないのだと思います。学生にとって基本動作から日常生活のつながりを理解するのは難しいようですが、臨床実習では必要なことだと思いますので、学科でよく検討したいと思います。
- 田福委員) 「2年前期で必要と考える専門的基礎力」で取り上げていた一連の流れを学んでいるとスムーズに進めることができると思います。評価と評価のつながり、評価とADLのつながりについて理解しているか疑問に思うことがあります。そのため、学生が横の繋がりを少しでも理解していることがわかると指導がしやすくなります。
- 東川委員) まず基本動作を見せて、「どこが悪いですか?」と質問すると、すぐに「右手の運動麻痺があります」という答えが出てしまいます。そこで、あえて「右手を使っていない」という表現を使ってもらうようにしていました。そうすると、次に「右手の動きを評価する方法は何ですか?」となり、初めて筋力の問題なのか、神経麻痺の問題なのかを考えます。次に「疾患は何ですか?—脳卒中です」となって、さらに「では、中枢の運動の評価方法は何ですか?」となって、初めて「ブルンストロームステージ」が出てきます。最初から疾患がわかってしまうと、「ブルンストロームステージ」だけが出てきてしまうので、このように考えを導くようにしていました。
- もう一つ、授業の進め方で工夫をしていた話をします。学生の評判が一番良かったのは、患者さんの評価から治療計画を立てるまでの一連の流れをたどる授業でした。ただし、その内容を細かく分けて、グループごとに考えもらう方法を取り入れていました。到達点まで答えを見つけたグループには追加のヒントや情報を提供して次の課題に進んでもらうという方法です。他のグループには負けたくないという気持ちが芽生えて、自然と競争が生まれます。また課題をどこまで進められたか、ゴールまでたどり着いた達成感もあって、それが楽しかったという感想を多く聞きました。このように達成感や競争心を提供することで学生は一生懸命取り組んでくれるのだと思います。
- 教員坂下) 授業の進め方は本当に頭を悩ませています。学生がどんなことに興味や関心があるのか、グループの難易度設定など、色々と試行錯誤してみたいと思います。

(3) その他 (学科長 種本)

- ・次回 第2回教育課程編成委員会 開催予定 10/23(水)または10/30(水)

以上

(記録 橋本尚子)